

イトクズモ (ミカツキイトモ) 発見記

國井 秀伸

島根県の宍道湖は淡水と海水の入り混じる汽水湖である。中国山地の水を集めた斐伊川が湖の西方より流入し、東方の大橋川を経てさらに下流部の中海、そして境水道を通り日本海へと流れ下る。宍道湖と海とのつながりは実はこれだけでなく、佐陀川という、江戸時代に開削されたもう一本の水路によっても水の行き来がなされている。この夏、この佐陀川において汽水産の水生植物、イトクズモ (*Zannichellia palustris* L.) を偶然に見つけたのでここに報告する。

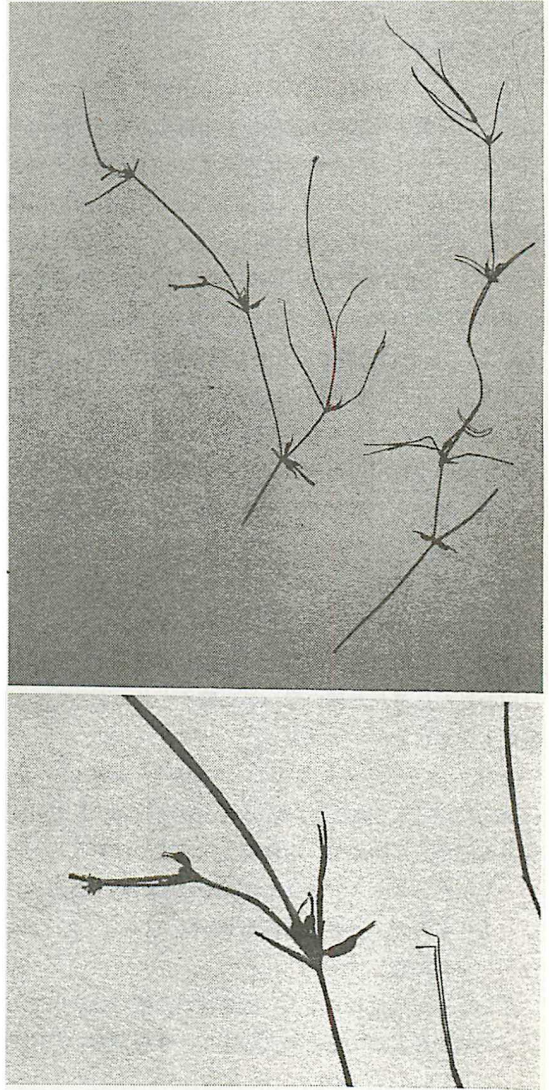
イトクズモと思われる植物が宍道湖に生えていたらしいことは、以前から島根大学理学部の枚村喜則氏から聞いていた。しかし標本はなく、さらに枚村氏が大橋川で見たという植物は切れもであったという。筆者も水草の生態を研究している身としてこの十年間に幾度となく宍道湖岸を注意して歩いてみてはいたが、イトクズモに出会うことはなかった。しかし、きっとどこかに生えているという期待はずっと持っていた。

それはこの夏、1994年7月9日の晩のことであった。佐陀川で懐中電灯を照らしテナガエビ採りをしていたところ、短い2本の切れもが、宍道湖方面から緩い流れに乗って岸边に漂ってきたのである。見た瞬間は斐伊川河口域の河川でよく見られるホソバミズヒキモかと思ったが、何か違うと感じその切れもを拾い上げてみたところ、あの特徴的な三日月状の果実がついていたのである。長い間探し求めていたこと、そしてこの植物が日本では絶滅危惧種であることもあり、その発見の瞬間は、大袈裟でなく、まさに感に耐えないものであった。

その後、生育場所の特定を行うべく佐陀川を船で探し回り、8月1日にイトクズモの自生地を宍道湖から500mほど入った西浜佐陀のヨシ群落内の水路に見つけた。水深は72cm、透明度は72cmを越え、底質は黒色軟泥のヘドロ状であった。

付記：汽水域に生育する水生植物として、これまでに大橋川ではコアマモの自生が、中海ではコアマモとカワツルモの自生が確認されている。

追記：絶滅危惧種のひとつであるミズアオイが宍道湖周



(上) 採集したイトクズモの切れも、
(下) 果実が特徴

辺で生育していることもこの9月に確認された。大雨による増水で流されたと思われる一抱えほどの大きな株が浮かんでいるのを、宍道湖北西部に流入する伊野川と境川の河口付近で、それぞれ9月16日と17日に、やはり偶然に発見したものである。今のところ自生地は確認されていないが、採集した植物は現在学内の水槽できれいな花を咲かせている。いつかきっと野生状態の群落を見つかけようと思っている。